

幼児の能動的参加を促すコンサートの試み

—— 絵プログラムを用いた幼児のリクエストによるコンサート実践 ——

教育学科 白 井 奈 緒 湊川短期大学 大 西 隆 弘

抄 録

本稿では、幼児がより能動的に音楽鑑賞活動に参加できる方策として、幼児が興味を示すイラストを曲目に添えた、絵プログラムを用いた幼児のリクエストによるコンサート実践を行うことにより、幼児の能動的参加を促し、音楽鑑賞活動が幼児にとって主体的な活動となり得るのかを検証した。参加者の様子を記録した映像と、保護者、保育者へのアンケート調査から幼児の主体性、能動性が発揮される場面を抽出し、幼児の主体的経験を出発点とする評価尺度SICSに基づき事例分析を行った。

幼児の絵プログラムへの興味・関心は高く、絵プログラムを用いることによって能動的な音楽活動への参加を促進することができた。また、保育活動としての音楽鑑賞活動の質をより高めていくために、子どもと演奏者の2者の関係性の間に保育者を介在させ、3者間で環境を構成し、互いに連携することが重要であるとの示唆を得た。

Key Words：幼児，コンサート，主体性，能動的参加，夢中度

1. 問題の所在

平成29年3月31日に告示された新幼稚園教育要領において、従前の幼稚園教育要領を踏襲し「環境を通して行う教育」を基本とすることが示された。これは「身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる」という幼児期における教育の見方・考え方を生かし、よりよい教育環境を創造することを目指すものである。また、平成28年度「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）には「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい

生活を展開」していくこと、「幼児の自発的な活動としての遊びを中心とした教育を実践することが何よりも大切であり、教員は、幼児の自発的な遊びを生み出すために必要な環境を構成すること」の重要性が謳われている。

筆者らが従事している音楽教育活動の中で、とりわけ歌唱や器楽表現活動においては、活動に対する意欲や主体性といった幼児の態度が比較的表出されやすく、幼児が醸し出す意志表現を周囲の大人が感受することはさほど難しくはない。しかし、鑑賞の活動においては「聴く」という行為の、一見受動的側面を有する活動の中で、幼児の主体性を捉えることは容易ではない。

幼児の「聴く」という行為に焦点を当てた村

上（2007）の研究の中で、村上はその「聴き方」の質を向上させることが保育の場で行われるコンサートを意義深いものにし、音を通して演奏者と鑑賞者とのコミュニケーションを図ることにつながると述べている。

また、植田（2014）は様々なアプローチで幼児の「聴く力を引き出す音楽活動」を検証した結果、「聴く力を引き出す音楽活動」が主体的に活動に関わる姿勢を引き出し、さらに他者を受け入れ、他者との関わりを深める活動に発展すると述べている。

多くの場合、保育の場におけるコンサートにおいて、演奏者と園児たちは初対面であり、外部の演奏者によるコンサートは園児にとって非日常の経験である。しかしながら、日常の保育の場で保育時間中に行われる行事は、保育の一環であることは言うまでもない。ところが外部の演奏者を招いたコンサートでは、環境構成や演奏内容は演奏者に一任されることが多く、全体として受動的な活動となっているのが現状であろう。

そこで幼児が音楽の「聴き方」に主体性を発揮し、幼児の能動的参加を誘発する仕組みを備えた音楽鑑賞活動の形態を提示することで、「聴き方」の質を向上させると同時に、音楽鑑賞活動を保育活動の一環として捉えた場合の保育の質の向上に寄与するとの仮説をたて、検証を行った。ここでは幼児が保育の場におけるコンサートに能動的に参加し、意識的に聴取する音楽鑑賞活動を「主体的な音楽鑑賞活動」と定義する。

2. 研究の目的と方法

2.1 研究の目的

幼児がより能動的に音楽鑑賞活動に参加できる方策を模索する中で、幼児が興味を示すイラストを曲目に添えた、絵プログラムを用いた幼児のリクエストによるコンサートの着想に至っ

た。絵と文字で曲目が示されたプログラムを使用し、その中から幼児がリクエストする曲目を演奏するコンサート形態によって、幼児自身が選んだ曲、または聴きたい曲を聴くことができる仕組みである。これにより、幼児の能動的参加を促し、音楽鑑賞活動が幼児にとって主体的な活動となり得るのかを検証した。

コンサートという非日常的で限定的な音楽・保育活動に関わる立場をとりながらも、そのプロセスを省察し、より幼児の能動性を触発する音楽活動を提案していく。

2.2. 研究の方法

同一の実践方法とプログラムにより、2回のコンサートを行った。1回目の実践Aは2017年7月にS市子育て支援事業の一環として未就園児親子84名を対象に行った。しかしながら実践Aでは参加幼児の大半の年齢が0～2歳児であったため、幼児の能動性を検証することが困難であった。

そこで本稿では実践Aを予備調査とし、実践A後に行ったアンケート調査の結果や反省点を検討した上で、実践Bを企画した。

実践Aの結果を踏まえ、1回目のコンサートのシステムと同一の方法で、対象者を保育園児に変更することで対象年齢を広げ、再度コンサートを行い、その様子を比較・検討することとした。

参加者の様子を記録した映像と、コンサートに同席していた保育者へのアンケート調査から幼児の主体性、能動性が発揮される場面を抽出し、事例分析を行った。その際、ラーバース（Ferre Laevers）教授らによって「経験に根差した保育・教育」という思想に基づき考案された、子どもの主体的経験を評価の出発点とする評価尺度SICS（Process Oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings）を観察評価の指標とした。

2.3 評価指標について

SICSは「子ども一人ひとりが遊びに没頭し夢中になっている状態に着目し、情緒的な安定・安心（emotional well-being）と夢中（involvement）について1から5の5段階で評定」（シラージ、2016）する評価尺度であるCIS（Child Involvement Scale）の自己評価版であり、「カール・ロジャーズの来談者中心療法などの臨床心理学の理念やジョン・デューイの教育哲学等を取りこみながらも、ラーバース教授独自の思想で、子どもの実存主義的経験を中心にして保育プロセスの質を捉えることを通して、子どものより豊かな経験へと向かう保育の質を考えていこうとするもの」（「保育プロセスの質」研究プロジェクト、2010）である。秋田らを中心とする「保育プロセスの質」研究プロジェクトによって、日本の保育に適した形に改良されたSICSの日本語版「子どもの経験から振り返る保育プロセス」が開発されており、次の3つの段階で子どもたちの姿や保育を振り返り、省察を通して明日からの保育につなげていくことを目指した自己評価方法である。これは長期的な視野で保育の省察とデザインのサイクルを構築するものである。

第1段階：具体的な子どもの姿を記録し、子どもたちの「安心度」と「夢中度」で表してみる段階

第2段階：なぜその値をつけたのかについて、「豊かな環境」「集団の雰囲気」「主体性の発揮」「保育活動の運営」「大人の関わり方」という5つの観点で保育を振り返る段階

第3段階：第2段階での振り返りから、次に明日からできることは何かを具体的に考える段階

本稿では本実践を保育現場における保育活動の一環と捉え、限られた条件下でこの評価方法

を援用しながら分析を行い、考察を行った。（注1）

〈「安心度」の評定〉

評定		
1	特に低い	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが明らかに不快感を示している。 ・ぐずる、泣く、叫ぶ、キーキー声を出す。 ・元気がなく、悲しそうにしていたり、おびえている。パニック状態になっている。 ・怒ったり、暴れたりしている。 ・足をバタバタさせたり、床に寝転がったり、物を投げたり、他人をたたいたりしている。 ・指吸いをしたり、目をこすったりしている。 ・環境へ働きかけなかったり、人との接触を避けたり、引きこもったりしている。 ・頭を自分でたたいたり、床に倒れたりなどの自傷行為が見られる。
2	低い	<p>子どもの態度、表情、行動から、子どもの気持ちが安定していないことを示している。しかし、評定1ほど明確な様子は見られず、不快感が絶えず示されているわけでもない。</p>
3	中程度	<p>子どもの態度は自然で、表情や態度に大きな変化がない。悲しそうなそぶりや喜びの表現、快適か快適でないかの様子もそれほど明確ではない。</p>
4	高い	<p>子どもは明らかに評定5に書かれている満足の様子を示している。しかし、持続的に絶えずその様子が見られるわけではない。</p>
5	特に高い	<p>観察中、子どもは楽しんでおり、実際満足している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもは楽しそうで、機嫌がよく、笑い、笑顔で、歓喜の声を出している。 ・子どもは自主的で、表現豊かで、元気である。 ・子どもは自分自身に話しかけたり、何かをしゃべったり、鼻歌を歌いながら活動している。 ・子どもはリラックスしていて、ストレスや緊張した様子を見せない。 ・子どもは開放的で、環境に積極的に関わっている。 ・子どもは生き生きしていて、はつらつとして、喜びにあふれている。 ・子どもは自信と確信にあふれた態度を見せている。

表1：幼児の「安心度」の評定（Laevens, 2005）

〈「夢中度」の評定〉

評定		
1	特に低い	<ul style="list-style-type: none"> 子どもはほとんど何の活動もしていない。 ・何かに集中しているように見えない。ボーとしていて、寝起きのような状態。 ・放心したような状態で、活気がない。 ・無目的な活動、行動が見られ、生産的な動きをしていない。 ・探求心や関心が見られない。 ・何かをしようとしないうち、心も動いていないように見える。
2	低い	<ul style="list-style-type: none"> 子どもはある程度活動しているが、たびたび中断してしまう。 ・少しは集中しているが、活動中に他の方を見たり、ぶらぶらしたり、ボーとしていたりしている。 ・簡単に気が散ってしまう。 ・行動が単純な結果しか生まない。
3	中程度	<ul style="list-style-type: none"> 子どもはいつも忙しそうにしているが、何かに集中しているようには見えない。 ・決まり切った行動が多く、活動に表面的な注意しかはらっていない。 ・活動に没頭しておらず、活動が短時間で終わってしまう。 ・活動への意欲がそれほど高くなく、熱中することもなく、挑戦的でもない。 ・子どもは、その活動で得られる十分な経験を得られていない。 ・子どもは自分の能力を十分に発揮していない。 ・活動が子どもたちの想像力を刺激していない。
4	高い	<ul style="list-style-type: none"> 明らかに子どもは活動に参加している様子が見える。しかし、常に精一杯取り組んでいるとは見えない。 ・子どもは絶えず活動に取り組んでいる。 ・活動中、真剣に取り組んでいるが、時たま、注意がそれることがある。 ・子どもは挑戦的に活動に取り組んでいて、活動へのモチベーションもある程度高い。 ・子どもの能力や想像力がある程度活動に反映している。
5	特に高い	<ul style="list-style-type: none"> 観察中、子どもは絶えず活動に取り組んでおり、完全に没頭している。 ・子どもは、活動中、中断することなく、焦点を定めて、集中している。 ・子どもは活動に対して高い意欲を持っており、活動に魅力を感じていて、辛抱強く取り組んでいる。 ・何か強い邪魔が入っても、気を散らすことがない。 ・子どもは注意深く、細部にも注意を払い、几帳面に活動している。 ・精神的な活動も、実際の経験も高いレベルである。 ・子どもは絶えず全力を尽くしている。想像力も精神的能力も最大限に働かせている。 ・子どもは活動に夢中になることを楽しんでいる。

表2：幼児の「夢中度」の評定（Laevens, 2005）

3. 実践概要

出演者：歌・進行担当：臼井奈緒

ピアノ担当：大西隆弘

楽器・歌・絵プログラム担当：岸田真紀

演奏曲目：絵プログラムに掲載した60曲の中から保護者・幼児のリクエスト曲を

演奏（実践A：27曲、実践B：14曲）

使用楽器：ピアノ・フルート・グロッケン・カバサ・クラベス・スレイベル・すず・スネアドラム・木魚・和太鼓・タンバリン・ウッドブロック・笛（ホイッスル・スライドホイッスル）・トライアングル

使用した絵プログラム：実践A・Bともに参加者全員にカラー刷りで配布した。（図1）

選曲は、古くから親しまれている童謡を中心とし、昨今あまり歌われていないが、是非現代の子育て世代の親子に聴いてほしいと筆者らが願う曲を含めた。曲のタイトルに添えられた絵には、曲の内容を想起させるようイラスト・色彩で工夫を凝らした。

3.1 実践Aの概要

第2回あいあい講座「親子で楽しむコンサート——子どもと聴きたい童謡の世界～あなたが聴きたい歌を歌います～」

日時：2017年7月6日（木） 10：30～11：30

場所：M短期大学3階リズムスタジオ

主催：S市子育て支援センター

参加者：S市在住の未就園児親子84名（内、大人38名・乳幼児46名）

3.2 実践Bの概要

「楽しい音楽会」

日時：2019年2月27日（木） 10：30～11：30

場所：寝屋川市

主催：H保育園

参加者：H保育園園児48名（2歳児13名，3歳児9名，4歳児16名，5歳児10名），保育者8名

4. 結果と考察

4.1. 実践A

実践Aでは受付時に図1のプログラムを配布し，演奏者がそのプログラムの中からリクエストを募り，演奏するという形式でコンサートが進められた。実践のはじめに，参加者がプログラムの中から好きな曲をリクエストすることによって成り立つコンサートであるということ，また参加者も聴衆としてだけではなく，一緒に歌える曲は一緒に歌い，参加してほしいという本コンサートのコンセプトを伝えた。

親子が挙手しリクエストした曲数は27曲で，演奏時間は1時間に及び，幼児対象のコンサートにしては長丁場となった。参加親子たちはプログラムに掲載している曲数（全60曲）の約半数をリクエストしたことになる。幼児が自ら挙手し，リクエストする姿も見られたが，多くの場合，親が子どもと相談しながら子どもの要求を聞き取り，リクエストを行っていた。リクエストする親子は，周囲を伺いながら静かに手

を挙げ，自分の番が巡ってきて希望の歌を聴いた後は，満足気にリラックスした様子で鑑賞しているように見受けられた。

コンサートの後半には「プログラムにはのっていないけど〇〇が聴きたいです」という積極的なリクエストをする保護者の姿も見られた。保護者へのアンケートの結果からは，保護者自身のコンサートへの参加姿勢と，保護者から見た幼児の姿，様子を窺い知ることができた。

しかしながら，実践Aでは参加幼児がほぼ未就園児であり，親子間の会話やコミュニケーションは行われていたものの，演奏者が幼児の発話や感情を伝える姿を直に捉えることが困難であったことから，絵プログラムと幼児の音楽への興味の因果関係を明らかにすることはできなかった。

4.2 実践B

ここではSICSによる評価尺度に依拠し，抽出したエピソードの事例検討と分析，考察を行った。

第1段階において，本来は個々の幼児の観察をもとにエピソードを記録し，一人ひとりの幼児の育ちの過程をつぶさに読み取っていくべき

♪本日のリクエスト・プログラム♪



図1：絵プログラム

ではあるが、本稿ではコンサート中に見られた幼児たちの全体像と、エピソードとして抽出した幼児の様子から、「安心度」と「夢中度」の評価を行った。

第2段階においては、演奏者である筆者ら3名と、本コンサートのH保育園の企画・担当者であるI先生を本実践の「保育活動の運営」に携わる当事者として、コンサートに幼児たちと参加していた保育者7名を参与者として位置づけて、「豊かな環境」「集団の雰囲気」「主体性の発揮」「保育活動の運営」「大人の関わり方」の5つの観点でそれぞれ振り返りと考察を行った。

第3段階においては、本実践の全体的な振り返りから今後の保育現場におけるコンサート活動への視座を提案した。

4.2.1 《第1段階》観察記録

・エピソード1「4・5歳児が集まるまでの様子」

(安心度：2 夢中度：2)

コンサート会場である遊戯室に一番初めに2歳児、続いて3歳児がやってきた。各自入り口でプログラムをもらうが、プログラムを見るよりも先に、ホワイトボードに貼ってある本日の出演者写真と楽器の着せ替え遊びに皆、吸い寄せられるように近づいていく。それぞれお気に入りのパーツを持って周りの先生や出演者に見せてくれる。気に入ったパーツを持ったまま座る位置までくる子もいる。

「はい、一回座ろう！星組さん座って！」とI先生が声をかけ、皆座る。「たいこになった！」という男児Aの声で皆がホワイトボードを見ると、出演者の顔の上に太鼓のマグネットが貼られ、出演者が太鼓星人になっていた。

・エピソード2「絵プログラムをもらったよ」

(安心度：3 夢中度：3+)

座って他の園児を待っている。I先生が「どれにしようかなあ〜」とプログラムを広げ、見始めると、皆もその様子を真似て自分のプログラムを広げ見始める。

「うさぎさんある！」「〇〇はたぬき〜！」「おまつりもあるで〜！」「は〜るがき〜た〜は〜るがき〜た〜」「かっちゃんもいっしょ〜！」「ぞうさんもある？」「これは？これは？」という子ども同士の会話が聞こえてくる。

I先生の「〇〇ちゃんがこれして（歌って）ほしいってお願いしたらしてくれるんやって。」という言葉聞いた途端、男児Bはピアノ演奏者のもとに駆け寄り「これ！」と「きしゃポッポ」を指さしリクエストする。

エピソード1・2は会場に入ってきてからコンサートが始まるまでの約6分間の幼児たちの様子である。エピソード1は、コンサート開始までの間をじっと座って待つだけではなく、コンサートで使用する楽器のイラストや出演者の写真に触れて遊べる場を作ることで、初めて出会うコンサートの出演者や楽器に興味をもち、これから始まるコンサートに対する期待感を高めるための導入の一例である。

エピソード2ではI先生の発言をきっかけに、幼児たちの関心が一気にプログラムに向けられる。その後I先生は幼児たちから質問攻めにあい、歌の一節を歌ってあげたり、幼児の言葉に対して「ほんまや〜、かえるののどじまんやなあ！」など共感的な声かけをしたりしながら、幼児の期待感を高める働きかけを行っていた。

・エピソード3「びっくりした！」

(安心度：4 夢中度：4)

コンサートは幼児たちの元気な「は～い！」という声と挙手（25名以上）から始まった。指名された女児Cは曲をまだ決めていなかったようで、しばらくプログラムを眺めてから「10！」とリクエストした。第一曲目に演奏したプログラム10番「うみ」では、演奏者の声量に驚いた様子で全員プログラムの存在を忘れ、演奏者にくぎづけで聴き入る。歌の二番の終わりに近づいてくると年長児4、5人はプログラムで次の曲を探し始める。

一曲目が終わって拍手が止んだ途端「つぎこれ～！」という声が聞こえた。

コンサートの開始から参加者の半数以上が勢いよく挙手する様子から、これから始まる活動への期待感が高まっている様子を感じられたが、まだこの段階ではC児のように、「この曲が聴きたい」という意思をもって挙手したのではなく、周囲の勢いと雰囲気と同調しているようにも見受けられた。演奏が始まると賑やかだった幼児たちが水を打ったように静まり返り、ポカンとした表情を見せていたことから、音楽が実際に演奏されたことで、初めてこのコンサートの活動内容や、プログラムとの関連に気づいたのではないであろうか。

・エピソード4「どんぐりが入ってた～！」

(安心度：4 夢中度：4+)

大半の幼児たちがリクエストする曲を、まだプログラムを見ながら探している中で、女児D（2歳児）が後ろを振り返り、I先生に訴えるようにピンときれいに手をあげ、挙手6名程度の中から早々に二曲目の選曲者に選ばれる。Dはプログラムを指さし「こ

れ！」と「ふしぎなポケット」を選んだ。

出演者が「今日みんなのお洋服にはポケットついてるかな？探してみて！」と声をかけると一斉にキョロキョロし、「あった～！」「ある！ある！」と言いながら見つけた子らが自ら挙手する。するとI先生が「あ～！どんぐり入ってた～！」と自慢げにポケットに入っていたどんぐりを幼児たちに見せ、幼児たちは羨ましそうにそのどんぐりを見つめていた。

二曲目からはピアノ以外の楽器も加わり、前奏に木魚が鳴り始めると、幼児らの視線が木魚に集まる。5歳児にはポケットをたたきながら聴く姿や、一緒に歌う姿も見られた。ポケットをたたきながら歌う演奏者を見て、徐々にポケットをたたき出す子が増えてきたので、後奏の16分音符の半音階上行箇所では「さあみんな！いっぱいポケットをたたくよ～」と声をかけると、みな必死でポケットを連打し、最後「やったあ！」と拍手で終わった。

「ふしぎなポケット」では演奏者が幼児たちを歌の世界へ誘う思惑から、「ポケットついてるかな？」と問いかけたが、I先生の思わぬ反応により、演奏者側の働きかけや幼児たちの夢中度の度合いが増長されたエピソードである。また本実践では.....部のように、プログラムの大半の曲に幼児たちが演奏に参加できる箇所を設定し、演奏者が意図的に声かけを行った。ポケットをたたき身振りをしながら歌を聴いている幼児の姿も見られたが、まだ二曲目ということもあり、幼児たちが十分に能動性を発揮して聴いている段階ではないと判断できる。そのため、.....部の演奏者の語りかけは、やや誘導的である。

・エピソード5「次は私をあてて！」

（安心度：4 夢中度：5）

三曲目は20人程度の挙手の中から女児Eが選ばれるが、別の男児F（2歳児）が立って大きな声で「とんぼ」とリクエストする。先生に「ちがうちがう、今はEちゃんよ」となだめられる。

その後の幼児たちの挙手の仕方も熱を帯び、様々な工夫やアピール方法が見られた。膝で立ち、高さでアピールし、何とかあててもらおうとする5歳児たち。「はーーーーーい！」「はーーーーーい！」「はーーーーーい！」と力の限り長い返事でアピールする子、超音波のような高音域で「は~~~~~い！」とアピールする子、手がぴんとまっすぐきれいにあがっている子、I先生の周りに群がり「次これ~~！」と猛アピールする子、I先生の耳元で「5番、5番！」と連呼する子。

コンサート会場に入ってきた時からどうしても「汽車ポッポ」が聴きたい男児Bは立ち上がって演奏者に直談判しに行き、熱意に押され「汽車ポッポ」に決定する場面もあった。採択されたBは喜び、先生とハイタッチし、満足気に鑑賞していた。

その後、挙手の数はプログラムの最後まで常に20人以上を保持し、計14曲が選曲された。

実践Bにおいて、幼児の能動的参加を最も確認できたのは、エピソード5に見られるプログラムをリクエストする場面である。指名されたいという思いから、手の挙げ方、声の出し方、表情、行動などによるアピール度合いは徐々に増していき、その手法は個性豊かでバリエーションに富んでいた。

幼児たちの「リクエストしたい！」「聴きたい！」という熱い思いを正面で受け止めていた

演奏者側には「もっと聴いてほしい」「希望の曲を全部歌ってあげたい」という思いが一層高まっていった。絵プログラムをとおした聴き手と演奏者の交流により、会場の雰囲気は時間を追うごとに活気がみなぎり、幼児の夢中度と安心度が上昇し、会場全体が一体化していく手ごたえを感じた。

・エピソード6「私の出番よ」

（安心度：5 夢中度：5）

「絵がかわいいから！」と選曲の理由までI先生に伝えて女児Gが五曲目にリクエストしたのは「うさぎのダンス」。

「うさぎのダンスはこんな風におしりフリフリ～」と演奏者がおしりを振って見せると、うさぎの絵が大きく服に描かれた女児Hがすくっと立ち上がり、得意げな顔で演奏者と一緒に腰に手を当ておしりをフリフリし始めた。そこですかさず「うわぁ！うさぎさんがいたよ！上手に踊っててすごーい！みんな拍手～！！」と声をかける。「みんなも立って踊ってみる？」と問いかけると5歳児は総立ち、4歳児は半数ほどが立ち上がり、2、3歳児もノリノリで演奏と踊りを楽しんだ。

「うああ、あつという間にウサギのダンサーがいっぱいになったね」と演奏者はコメントした。

ここでは女児G、女児Hの言動に着目する。女児Gはただ聴きたい曲を番号や指さしで伝えるだけではなく、選曲した理由を自分の意志でI先生に伝えている。女児Gの気持ちを受け止めたI先生は、女児Gとのやりとりを全員に伝えることで、女児Gの意欲的な姿勢を全体で共有できるように働きかけた。そのような流れの中で、女児Hの____部に見られる主体的な行動が発現した。

女兒Hの行動を受け、演奏者は先ほどのI先生と同様に女兒Hの意欲的な行動を称賛し、その後全体に「一緒にやってみる？」と問いかけた。これはエピソード4の____部で演奏者が行った誘導的な働きかけと比較すると、幼児たちのやりたいかどうかの意思確認を行う声かけであり、幼児の主体性への問いかけであると理解できる。

・エピソード7「一緒に演奏しよう」

(安心度：4 夢中度：5)

I先生がここで一言「先生いいの見つけてん。楽器の先生も素敵やし、みんなも一緒に楽器したらどうかなあ。たぬきの曲で。」と準備しておいたカスタネットを使う曲を9曲目にリクエストする。

幼児たちはカスタネットが配布されると嬉しそうにたたき始める子もいるが、プログラムも放したくない様子で握りしめているため、両手がふさがって困っている子もいる。その様子にI先生が「プログラムはちょっと置いておこうね。」と声をかけ、無事カスタネットをたたける体勢が整った。

「このカスタネット（コンサート用）とみんなのカスタネット（幼児用）はちょっと音が違うよ！ふたつ続けてたたくから聴いてみてね。」と演奏者が声をかけ、二種類のカスタネットを連続してたたくと「ちやう！」と一番近くで聴いていた男児Iが驚いた様子で即答。

カスタネットを持った幼児たちと3曲続けて演奏した後、カスタネットが回収されるとすぐにまた、プログラムを握りしめる2歳児たち。

I先生から事前に、幼児たちもカスタネットを使って数曲演奏に参加させたいとの要望を聞いていたため、I先生のリクエストがきっかけ

で、カスタネットを用いた幼児たちとの合同演奏が行われた。コンサート開始から30分ほど経過した絶妙のタイミングでのI先生の提案のおかげで、少し気が散り始めた様子であった幾人かの幼児が、再度活動にやる気を見せ始めた。

I児がカスタネットの音色の違いを聴き取り、思わず声をあげてしまう様子からは、かなり集中して活動に没頭していることが読み取れる。また、プログラムを放したくない、あるいは活動後すぐに手に取り握りしめる幼児の様子からは、プログラムを手元にとっておきたいという幼児の意思が感じられた。

4.2.2 《第2段階》観点別分析と考察

4.2.2.1 「豊かな環境」の観点における考察

本実践において「豊かな環境」の観点を担保している項目として次の4点が挙げられよう。

- 1：多くの楽器を使用していること
- 2：60曲から選べる絵プログラムの使用
- 3：個々の聴きたい曲をリクエストできること
- 4：生演奏に触れられること

本実践の人的環境の役割を担った演奏者が設定した本実践の環境構成について、保育者へのアンケートの自由記述の中で次のように言及されている。

- ・プログラムが持てて嬉しくてイラストと今歌っているのはどれなのかと確認したくて必死な姿、曲のタイトルをイラストで予想している姿等が印象的でした。
- ・絵プログラムに目がいき、「聴いていたのかな？」と思うところもありましたが、子どもたちは楽しく参加していました。
- ・子どもたち一人一人にプログラムを用意してくれていたの、絵を見てどんな曲か想像したり、「何の歌？」と聞きにきたり、リクエストされた曲はどれか、聞きにき

ていて興味をもって参加できていました。持ってきてくださった楽器や写真などのパネルにみんな興味をもっていて楽しんでいたなあ、と思いました。

普段の幼児の姿を知るH保育園の保育者の記述からも、実践中の幼児の姿が本実践の提示した「豊かな環境」を肯定的に受け止め、彼らなりにプログラムに関わる姿が見られたと理解できよう。

4.2.2.2 「集団の雰囲気」の観点における考察

「集団の雰囲気」は、幼児の「安心・安全」を捉える「安心度」を評定する際の重要な目安であると言える。

エピソード1は入室直後で、いつもと違う部屋の様子と見知らぬ出演者の存在に少し緊張感をもっている表情が特に低年齢児に見られたため、安心度は2と判断した。「集団の雰囲気」は、エピソード5の幼児の挙手時の様子から、徐々に変容していることが窺えよう。

当初の緊張感が完全に和らぎ、安心度が5と判断できたのは、エピソード6のあたりである。「みんなも立って踊ってみる？」という演奏者の誘いに立ち上がる幼児の人数は、エピソード4の「ポケットをたたこう」という誘いに反応を示した人数より明らかに多く見られた。さらにエピソード7では全員にカスタネットが配られたため、全員での参加が余儀なくされた。

記録された映像からは、プログラムの演奏曲数を重ねていくことで、緊張感が安心感へと変容していく過程が見てとれた。

4.2.2.3 「主体性の発揮」の観点における考察

幼児の「主体性の発揮」は、幼児の「夢中・没頭」を捉える「夢中度」を評定する際に密接に関わる視点である。エピソード1～7における____部は、すべて幼児たちの「主体性の発

揮」が見られた場面であり、それらは幼児が活動に夢中で参加し、没頭している様を裏付けている。特にエピソード5では、「集団の雰囲気」の高揚と幼児たちの「主体性の発揮」が相乗作用を生み、互いに高め合う結果となっていたと考えられる。

さらに保育者へのアンケートの自由記述において見られた、「歌声を真似ようと同じように裏声で歌う子もいました（5歳児）。フルートやピアノを真似て指を動かしている子もいました。」といった、演奏から受けた印象や体験の再現行為は、まさに「主体性の発揮」された幼児の姿であると言えるのではないだろうか。

4.2.2.4 「保育活動の運営」の観点における考察

実践A・Bは前提として、演奏者と聴き手の「対話的なコンサート」、そして「聴き手の能動的参加を促すコンサート」の在り方を模索した試みである。そのため、本実践を運営する当事者間ではこれらのコンセプトを共通認識した上で活動の運営を行ったが、曲目の定まらない本実践ゆえに生じた課題も見つかった。

エピソード7では、挙手した幼児の中からリクエスト者を指名する役割を担っていたI先生が、子どもたちにカスタネットを使って一緒に演奏に参加させたいという思いで、カスタネットの演奏に適した「証城寺の狸囃子」を自らリクエストした。さらに、楽しそうに演奏に参加する幼児たちの姿を見て、もう数曲一緒に演奏を楽しませてあげたいという思いから、その後「肩たたき」「おもちゃのチャチャチャ」と続けてI先生のリクエストにより、幼児たちはカスタネットで演奏に参加することとなった。

楽器の演奏を堪能し、満足気な様子の幼児たちに、再びプログラムを用いてリクエストを募るかと思われたが、ここでI先生が指名したのは同僚の保育者のA先生であった。I先生は「どの曲だったらフルートの音が聴けるかな？」

とつぶやきながら、まだ演奏者が持参した楽器の中で一度も使用されていなかったフルートの音色を、子どもたちに聴かせてやりたいという思いをA先生に託したのである。そこでA先生は「カナリヤ」をリクエストし、無事フルートは演奏され、幼児たちはその音に聞き入っている様子であった。

このような経緯によって、全14曲の演奏曲中4曲が保育者のリクエストによる選曲となった。それは、I先生を含む「保育活動の運営」側の共通認識が不十分であったため、結果として筆者らが本研究の主旨として当初想定していた幼児の完全なるリクエスト体制が徹底できなかったことを意味する。本実践を保育活動として捉える限り、保育者の立ち位置について計画段階において想定しておくべきであったが、I先生や他の保育者の役割についての設定が曖昧であったゆえに生じた経緯であった。

これらを踏まえ、次項に「大人の関わり方」の観点において、保育者の役割と演奏者の関わりについての考察を行う。

4.2.2.5 「大人の関わり方」の観点における考察

「大人の関わり方」として、まず実践Bにおいて演奏者とH保育園の幼児たちを繋ぎ、活動の進行と展開を握る役割を担ったI先生の幼児への働きかけと立ち位置について、また、I先生以外の保育者の役割についての検討を行う。エピソード1～7の〰〰〰部で示したようなI先生の共感的な声かけや関わりは活動中に終始見られ、I先生の働きかけが幼児たちの活動に対する夢中度や安心度に直接的に大きく影響を与えていることが確認された。当然ながらI先生が幼児たちにとって身近で親しみのある存在であることが大きな要因ではあるが、また、幼児たちと同じ場所で、同じ目線の高さから演奏を享受しているという立場であるということが影響していると考えられよう。

コンサートに参加していたI先生以外の保育者7名においても同じく、幼児を膝に乗せたり抱きしめたりしながら、幼児たちと同じ場所で幼児たちを保育しながらI先生との連携をとっている姿が見られた。先生方の幼児への働きかけによる音楽活動への波及効果、幼児の安心度・夢中度への影響は絶大であったが、それは幼児たちにとって本来指導的立場にある保育者が、この場においては自分たちと同じ立場で音楽を享受しているという関係性の変化に起因しているとも解せるであろう。

このことからI先生以外の保育者には、曲をリクエストする意思があれば挙手することもできる、幼児と同じ条件の「聴き手」としての役割を担ってもらうことで、幼児たちが安心して音楽を享受できる環境を確保することができると言えるであろう。

しかしながらI先生は、子どもたちと同じ「聴き手」ではありながら、コンサート全体のファシリテーターとしての役割を担い、H保育園の子どもたちと筆者らの実践におけるねらいとを結びつけ、より質の高い保育活動として音楽鑑賞活動を実現させる鍵を握っているのである。それらのことからI先生の役割とI先生以外の保育者の役割を同一視せず、それぞれに意味を持たせて設定する必要が確認されよう。

外部の演奏者の行う保育場面でのコンサートにおいて、I先生のような役割を担う保育者を設定し、事前に実施園におけるコンサートのねらいを把握した上で共に運営に携わってもらうことが重要であろう。そのファシリテーターが幼児の生得的な音楽欲求と演奏者の専門家としての音楽欲求を円滑につなぐことで、質の高い保育活動としてのコンサートが実現することが示唆されよう。

そのため、ファシリテーターの役割と立ち位置について、また実施園の日常的な音楽活動の取り組みの様子や、本実践のような特別な音楽

活動に対する要望について、事前に園側と演奏者間で話し合い、その上で活動運営の細部の調整を行うべきであろう。

次に演奏者の幼児への働きかけについて検討する。演奏者も可能な限り幼児の様子や表情から現状を把握しつつ、絵プログラムを媒介して幼児の主体的・能動的参加を助長する働きかけを心がけたが、演奏者としての立場で行う働きかけは、その内容が音楽的側面に偏りがちであり、それだけでは幼児の安心度や夢中度の向上に寄与するには不十分であったと言えよう。

5. 《第3段階》まとめと今後の課題

本論では幼児が音楽の「聴き方」に主体性を発揮し、幼児の音楽鑑賞活動への能動的参加を誘発する試みとして、絵プログラムを用いたコンサート実践の検証を行った。

実践Aでは1.1で「主体的な音楽鑑賞活動」と定義した、子どもが保育の場におけるコンサートに能動的に参加し、意識的に聴取する音楽鑑賞活動が、絵プログラムによって十分に促進されたとは言い難く、詰まるところ保護者の主体性に導かれ、乳幼児の音楽活動が成立しているとの結論を得るに至った。

実践Aの結果を踏まえ、実践Bにおいて対象者・実施場所等を変更し、再度コンサートを試みた。実践A・Bの2回のコンサートにおけるアンケート調査と、実践Bにおける幼児の「夢中度」「安心度」に焦点を当て行った保育の質的評価の検討からは、幼児の絵プログラムへの興味・関心は高く、絵プログラムを用いることによって能動的な音楽活動への参加を促進することができたと見えよう。リクエストすることによって自分の意思がコンサート内容に反映されることが、さらに積極的聴取の態度へとつながり、また絵プログラムを媒介させることによって、演奏者と聴き手の会話・コミュニケーションが成り立ち、一方向的なコンサートでは

なく、双方向的なコンサートが実現できたことも注目すべき点である。

さらに実践Bからは、保育活動としての音楽鑑賞活動の質をより高めていくために、子どもと演奏者の2者の関係性の間に保育者を介在させ、3者間で環境を構成し、互いに連携することが肝要であるとの示唆を得た。

今後の課題として、演奏者が音楽を「提供」し、保育者がその時間を演奏者に「委ねる」一度きりの音楽鑑賞活動ではなく、保育者と演奏者が共に幼児の音楽的発達へと繋がる音楽体験の実現や、音楽に対する興味と意欲の向上にむけて、事前に保育のねらいに沿った活動内容を精査し、事後にそれぞれの立場で捉えた幼児の様子を共有し、振り返ることをとおして、さらに充実した音楽体験の場を作りあげることを目指したい。

また、同一の絵プログラムを用いて、同一の保育現場で2回目、3回目のコンサートを実践することで、演奏者と幼児の関係性や幼児の「安心度」「夢中度」に変化が生じるかどうか、さらに「今度こそあててもらいたい」、あるいは「もう一回リクエストしてみたい」という、1回目の活動を経て一層能動性を高めた幼児の欲求や姿が捉えられるかどうかを改めて検証したい。

最後に、どの曲でどの楽器が使用されるのかを示し、幼児が聴きたい楽器をもとに選曲できるよう、絵プログラムを改良したり、使用楽器の紹介方法に検討を加えたりすることで、一層幼児の聴きたい欲求を喚起する音楽鑑賞の形を提案していきたい。

〔注〕

- 1) 表1：幼児の「安心度」の評定, 表2：幼児の「夢中度」の評定は, 「保育プロセスの質」研究プロジェクト「子どもの経験から振り返る保育プロセス—明日のより良い保育のために—」(2010) より引用。

〔引用文献〕

- ・ イラム・シラージ, デニス・キングストン, エドワード・メルウィッシュ, 秋田喜代美・淀川裕美 (訳) 『『保育プロセスの質』評価スケール』, 明石出版, 2016 : pp.94-96.
- ・ 植田恵理子 『「人と関わる力」を育む —「聴く力を引き出す音楽活動」の有効性—』 『花園大学社会福祉学部研究紀要』 第22号, 2014 : pp.39-48.
- ・ 中央教育審議会「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」 2017 : pp.72-83.
- ・ 「保育プロセスの質」研究プロジェクト「子どもの経験から振り返る保育プロセス—明日のより良い保育のために—」 2010 : pp.8-20.
- ・ 村上康子 「幼児の音の聴き方にみる音楽技能の萌芽」 (特集 協同プロジェクト報告「乳幼児と音楽」 (その1) 幼児と音楽文化の出会いを考える—中瀬幼稚園コンサートをめぐって), 『音楽教育研究ジャーナル』 (28), : pp.22-34.
- ・ 文部科学省「平成29年度告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領<原本>」 チャイルド本社, 2017 : pp.5-22.

(うすい なお 教育学科)

(おおにし たかひろ 湊川短期大学)

佛教大学教育学部学会紀要 第19号（2020年3月）